

「北の道路は名俳優」

田園地帯を貫く直線道路、樹海を巡るワインディングロード。北海道の景観を特徴づける各種の道路は、昔から映画やTVドラマ、CMに数多く登場し人々の記憶にきざまれています。「名作の影には、いいロケ地有り」と言われる通り北海道の道路はドラマを印象づける、名俳優の役割も担っています。

こんな風に道路は物流、人流の主役であるばかりではなく防災空間、環境空間の役割のほか、時には文化的な意味あいさえも持っているのです。今回は道路の持つ文化的側面や最近注目されている映像産業への可能性等を語りあっていただきました。



〈出席者〉

佐々木美佳氏／札幌テレビ放送(株)スピカ事業部

中島 洋氏／市民出資映画館「シアターキノ」代表

守分 寿男氏／演出・映像プロデューサー(元北海道放送常務取締役)

山野 久治氏／ロケーションコーディネーター兼俳優(オフィス312代表)

(司会)東村 有三氏／まちづくりプランナー(C.S.P.T地域計画機構主席プランナー)

「風花」関係の写真提供：(株)ワークスロケーションクルー 風間 彰氏

東村(司会)：最近、映画やCM(コマーシャル)の撮影場所として北海道が注目されている、という話を聞きました。また、こうしたロケを誘致し、あらゆる便宜をはかるFC(フィルムコミッション)という組織を設立しよう、という動きもあります。

たしかに北海道は今までも数々の映画やドラマの舞台になってきたし、CMも数多く撮影されております。テレビドラマ「北の国から」では富良野が一躍有名になりましたし、最近では空知管内の沼田町がNHK連続テレビドラマ「すずらん」の舞台になりました。また、映画「鉄道員(ぽっぽや)」では上川管内の南富良野町が注目され、小樽を舞台にした映画「Love Letter」では韓国の若者の間で小樽人気が高まったといえます。

今回は、映像のプロの方々に集まって頂き、こうした現象の背景にある北海道の風景の特質等を、道路を中心に語って頂きたいと思えます。

北海道の風景は根源的イメージ。 あるいは脱日本的イメージ。

東村：まずは、北海道の風景の特質について伺います。

中島：僕の昔撮ったもので16mmの長編映画があります。北海道を一周して撮影したのですが、そのとき感じたのは、釧路湿原はなにやらアフリカのだし、そして山を越えるとドイツ的だし、サロマ湖周辺の坂なんかは朝鮮のようでした。北海道を一周すると、イメージが匿名であるというこ

とに気がつきます。無名性の風景が北海道にはあるんですね。本州では場所のイメージが強すぎるし、そういう意味で北海道はいろいろコーディネートできるようです。

山野：北海道で撮影したcanonのCMでは、「人間の原風景」と思わせるようなイメージの場所がテーマになっていました。そこで大事だったのは、空と動く雲。そこに父と娘がいるシーンで「カメラをもってくれば・・・」という台詞が入る。そこでは「北海道らしい」とかではなく、「風景のプロトタイプ」を求められていたんです。

守分：映像にはイメージから先行させる場合と、逆に、現場からイメージを膨らませる場合があります。イメージからそれにあつた現場を探すとすると非常に難しい。一度大変な目にあつたのは、作家の、安岡章太郎氏の作品で、「おじいさんと少女が崖の下で暮らす」という場面がありました。このイメージに合った場所を探すために、北海道の海岸線を一周したことがあります。ついにみつけたのが積丹の入舸という場所の岩のトンネルを抜けた先。そこに断崖があつて、その下にニシンの番屋が2、3軒あつて、そこを使いました。

CMの話で言えば、S30年代のフォルクスワーゲンのCMが非常に印象深いですね。1カットで、車が地平線に点のように現れて、そして地平線に消えてゆく。消えてゆくところにフォルクスワーゲンという文字が入る。私にはこれが当時衝撃的で、それを真似しようと思いました。それで、昭和30年代の後半、各社持ち回りの15分番組があつ



まっすぐな道(美瑛町)

札幌生まれ札幌育ち。報道記者、YOSAKOIソニー祭り等のイベント運営等を経て現職。現在はスピカプラザのキャラクターグッズ開発や番組ビデオや書籍の出版も手がけている。映画鑑賞は昨年170本を誇っている。



札幌テレビ放送(株) スピカ事業部
佐々木美佳氏

て、サロベツ原野の真ん中にある小さな集落にあるバス停を撮影に使った。そこには子供たちが通学のために集まる。そこで、通学バスが地平線から現れ、子供たちを乗せて消えてゆくというシーンを作りました。結構絵になりましたね。

中島：確かに北海道の道には「直線」というイメージがありますね。僕らも自分の映画で「尾岱沼」のすぐ近くの一直線の道路で、車が向こうから来て、超望遠レンズをつかって、向こうから陽炎で何かが一瞬と来るというシーンを撮ったことがあります。そういう風なモノを求めたくなるというのが、北海道には常にあると思います。また、生

活道路ということであれば、多摩ニュータウンと恵庭の住宅地の街路のイメージは全然違う。同じアスファルトの道路でも全然感じがちがうんです。東村：北海道らしい映像というのも求められることがあるんですか？ また意識することはありますか？

佐々木：全国ネットでは、北海道らしいものをつくるのが求められます。バックは緑で、きれいで、そういうイメージが北海道の映像に対するニーズのようです。たとえば「YOSAKOI」4番街での踊りも、周りはビルばかりですが、大通り公園の緑をバックにすることで、売りができた(笑)。「北海道はこうだから」という固定イメージがいつもまとわりついているんです。本当の北海道というものを私は見せてあげたいと思います。ステレオタイプではなくリアルなものです。

守分：それは中央が求めるものと地方が求めるものとの違いです。はじめの頃は中央から北海道へという図式で、アイヌとか大自然とか、なにか珍しいもの。それが70年代になると、東京に人がどんどん出ていって地方はなにやら錯ついたイメージ。オイルショックになると、森とか湖とかが、北海道のイメージになる。

倉本聡さんがまだ東京にいた頃、かなり喧嘩になったことがあります。「それは東京感覚だ」「北海道の生活はそうではない」と。倉本さんも負け



来春公開される相米慎二監督作品「風花」、陸別町上利別でのロケ風景



「風花」出演の小泉今日子さんとロケーションコーディネーターの風間さん

ず嫌だから結構言いあった。それが今度富良野に倉本さんが来て、富良野と札幌ということで、言っていることが全く逆転してしまった。自分の立つ位置で言論が全く変わってしまうということです。

中島：全くその通りで、制作者と消費者との戦いな訳です。北海道は確かにロケーションが多い特異な場所で、映画だけでも300本は越えています。その中には、名作だと思う作品もあるけど、正直言ってやっぱり東京が求めるステレオタイプなものもあって、北海道の視点が入っていない。北海道の人が制作サイドのポイントに入っていないと、この状態はなかなか変えることができないと思いますね。東京の人がロケ地を決めてきてくれたからうれしいと思うのではなくて、僕たちが映像を実際につくって、「ほら、これが北海道だよ」と言わなければならない。

ロケ地は観光の目玉になり得るか？

東村：最近「ロケ地観光」なんて言葉がありますよね。映画やTVドラマ、CMで撮影された舞台に観光客が押しかける現象です。本州の地方自治体なんかは連続ドラマ等の誘致にもものすごく力を入れているところもあるそうです。やはり映像にはそれだけの力があるのでしょうか、また、その功罪はいかがでしょうか？

佐々木：『幸福の黄色いハンカチ』の夕張とか、『Love Letter』の小樽とか、ずいぶん観光客が来ているようですね。

中島：昨年、北海道でロケされた今までの作品の中から「北海道ロケ100選」を選んでみました。なかなか素敵な作品が多いですよ。将来道民の財産としてフィルムライブラリーにでも保存してはどうかと思います。

守分：モノによるとと思いますが、NHKの大河ドラマや朝の連ドラに比べて、映画の場合は一種の浅い観光文化のような気がします。ロケ地は観光スポットにはなるけどそれがいつまで続くのか、一過現象に終わりがちな感じがします。

佐々木：私はF1(購買の世代、20代後半～30代)で、購買意欲があり、観光にお金を出し、映画にお金を使いますが、社内でも、視聴率を左右するのはこの世代だと教えられます。映画もそういう人向けに作られているんだと思います。私たちはミーハーだから、映画で撮られた場所に行きたくなる。ロードムービーがはやるのも、それがステレオタ

イプかどうか、ほんとの生活はどうかなどは置いて、実際にスタイリッシュでおしゃれで、すてきな場所は行きたくくなります。私の場合、旅行に行った場所、行きたい場所は常にキーワードが映画になっています。「深い川」という映画を見てインドを旅行し、「グッバイモロッコ」の土の色が印象的でモロッコへ行きたいと思った。イギリスの映画を観てロンドンに行き、レスリーチャンの『天使の涙』『恋する惑星』などを観てすぐ香港に行ってみたりしました。

本当に自分でもいやだなと思いつつも、やはり映画に影響されるところがあって、それが慰めになるのであれば、一過性のものでいいと思うんです。本当に北海道を見てもらいたいという気持ちをもって発信できれば一番いいんですが、一過的な観光客みたいな人たちも意外と見逃せない。映画で観て、あこがれて行ってみる。実際と映画とは違うと感じても、本物を見たぞと言う気持ちになれるので、それはそれでいいと思うんです。

東村：ロケ地はただ単に映像だけではなく、ストーリーと場所のイメージが合致してるから力を持つんだと思う。そういう意味では「北海道のイメージをきちんと捉えた映像」ってあまりなかった気がしますね。

守分：北海道のイメージは人によって様々です。結局はいい映画を観て、それぞれが感動して、ロケ地を訪ねるといふ行為が生まれればいいと思います。だから、北海道がロケ地で、本当に存在感とか、生活感とかが全くない無名性のような映画もあってもいいと思います。問題は中身です。最初から客を呼びたいと思って作る作品には「いやしさ」があります。

中島：フィルムコミッショナーの立場から見ると、



演出・映像プロデューサー
(元北海道放送乗務取締役)
守分 寿男氏

大分県出身、9歳より北海道在住。大学卒業後テレビ局を迎えた北海道放送に入社。以来退社までドラマ(東芝日曜劇場など)を中心に演出、プロデューサー業務。倉本聰氏と組んだ「ホンカンシリーズ」や「幻の町」等で、芸術祭賞やギャラクシー個人演出賞など数々の受賞歴がある。

市民出資映画館「シアターキノ」代表
中島 洋氏



学生時代より札幌在住。フリースペース「駅裏8号倉庫」事務局長や札幌映画祭実行委員を経て、現在「シアターキノ」代表及びオーガニック・キッチン「エルフィナンランド」オーナー。映像作家としても活躍。最近は「北海道FC」設立のために活躍中。

一過性だとしても、そういうノウハウを積み重ねて行くことが大切だと思います。「すずらん」だけではなく、次の映画のロケが来たときに、サポートできるカタチにして行く必要があります。さらに何か「もてなし」の精神、付加価値をつけることも大事で、例えば、観光客の方が来ていただいた時に、もてなしの気持ちをもって、ロケで出したものを名物として売り出すとかですね。

守分：一つ落とし穴もあります。作る側は制作費が安ければそれでよい。そこで自治体が出資してセットをつくった。人がきた。ところが1年後まったく人がこなくなったりする。せっかく作り上げたセットが完全に廃墟になってしまうというリスクがあります。これをケアしていくことを考えなければならぬ。結局、観光客に来て欲しいと言う気持ちが先に立ってしまって。作品も話題にならなければ、投資したものが返ってこない。北海道の場合にこのケースが多いのではないのでしょうか。

フィルムコミッションの可能性は？

東村：ロケの実際はどうなんですか？

山野：CMの場合、撮影の時間が非常に短い。ロケハンに数日、本番数日、長くて一週間くらい、というスケジュールです。道内のコーディネーターがついていても、もう二度と撮影には協力しないというロケ場所がたくさんあります。作る側にロケ地を貸してもらっているという感覚はなくて、「使ってやっているんだ」という考えで行っているんです。地元の人たちは通常の仕事以外のところで協力してやっている。でも、ああしろ、こうしろとスタッフは要求だけ。ゴミは散乱しているし、車で乗り込んじゃ行けないところも乗り込んで、

ホントに自然破壊をして帰っちゃう。釧路湿原なんかはそうで、アングルに邪魔だから木を切ってしまったとか。そういうのを無許可でやっている。責任がなく、ゲリラ撮影して終わり。

私の場合は、いろいろ細かく気を使い、ここではたばこはダメとか、ここから先は歩いてはダメとか言います。地元の人たちから一切協力しないといわれたこともあります。そのうちに協力してくれて缶コーヒーを差し入れしてくれたり、荷物を積んでくれたりしたこともあります。撮影が終わると、「お前は紳士的だ」と言われ、「また来い」と言ってくれる。ロケに行っても、「また来てくれ」と言われる仕事が見たいですね。人間関係が悪くなったらどうしようもないからね。

守分：東京のスタッフも、映画なら長期間なのであまり無茶はしないと思いますが、テレビで3、4日のロケをする場合は、キー局から実際に社員が来るのではなくて、下請けのプロダクションの会社 comes。下請けだと責任感がなく、2度とここには来ないからという考えを持っているので、マナーが悪い。今は機材が軽量化しているから、東京から4、5人のスタッフで来て、宿を写してやるからタダで泊めろとか。さらに迷惑かけ放題で、帰ってからも礼状の一本もこない、というケースがホントに多い。これは気をつけたいといけませんね。

東村：中島さんはFCの仕掛けを一生懸命つくろうとしています。地域に、北海道にどんなことをねらって動いているのですか？

中島：FCというのはロケ地の誘致とか、ホテルの手配とか、来ていただくための細々としたことをやる仕事です。ロケ地でもいろいろ行政の許可が必要になるところが多いんですが、はじめから全部できるわけではないので、できることから少しずつ増やしていきたいと考えています。

実際にそれで地域がどうなるのかと言えば、地元でずっとロケをすれば、間接的にでもお金になる。それと、ロケ地観光という後につながるものになる。もう一つ、これから重要視したいのは、ロケ地を誘致することは、単なる観光ではなく、地域のコミュニティづくりにもなにか関わることができると思います。地域の住んでいる方々とロケをしに来る人たちが交流をして、様々な知恵が出てくる。例えば定年退職された方々がロケのボランティアに加わることで、地域に役立つお手伝いができるチャンスが生まれます。映画を媒体として地域に役立つこと、地域の文化的な側面を向

上させることができると考えています。

東村：受け皿を作れば、今までよりはロケが来ることが増えるかもしれない。今までよりは人が集まり、経済的には潤うでしょう。しかし、新しい施設を作って、ロケ隊を呼んだり、観光客を呼んだりするとしても、その維持が大変でしょうね。

中島：今あるものを使っていくという発想で十分です。ロケ用のセットも含めて新しいモノを作るのではなくて北海道に残されたすばらしい財産をもう少しうまく活用できないか、ということです。私たちの町にはこういうものがあって、こういうお手伝いができるというような、これを無理しないで集めてくるというカタチからスタートすればいいと思います。

守分：それを逆に言うと、それぞれの地域の個性をどう再発見してゆくのか、ということになります。これをさらにネットワークし、発信してゆくのもFCの仕事でしょう。

山野：例えば、具体的には場所を言えないが、あるダムで季節の一時期に水が干上がって、一年に2週間ほどしか底を見せないダムがあります。底が見えたときのその空間は非常に不思議なんです。そういう場所が札幌近郊でもあります。そこに行くためには道路もわからなければならない。そこでFCの出番になります。

余談ですが、廃坑の町の小学校。これを爆破シーンで使いたいと思って、いざ数年後に行ってみると、きれいな更地になっていました(笑)。地元にとっては邪魔なものでしょうが、このように映像に使えるようなストックが簡単になくなってしまふ。地元にとってどうにもならないものが、ある視点からは非常に使えるものだったりするんですけどね。

北海道の道路と映像の関係

東村：「映像」から見た北海道の「道路」についていかがですか？

山野：北海道の道路は、車のCMがひととき最盛期だった頃、ほとんど走りまわりましたね(笑)。「道」に関して言えば、北海道でも今は「冬季通行止め」の場所が少なくなってきている。CMに関しては電柱もNG、地域を表記する標識もNG。だから北海道らしい看板や標識があると、自分たちで下げちゃうとか、木か雑草で隠しちゃうとかしたことがあります。道路が整備されて行くほどCMには使えなくなってゆくようです。(笑)

中島：今までは、電柱がない北海道の道路というのが貴重でしたが、これからはCGのコストが安くなってゆくの、簡単に電柱を処理できたりする。だから、北海道の道路は電柱がないですよということを売り文句にしても、今やダメでしょうね。でも後ろに電柱があるのに、監督が「ないものと思って演技して」と言ってもそれは違和感がある。そういう意味で北海道の持つ空気感は大切です。それは北海道が持っているすごい力でもある。非常にナチュラルな演技ができるということです。

山野：今はどんな処理もできますが、監督によってはCGは一切使わない人もいます。北海道を求める自然の風景を使うときに、そういう監督がけっこう多い。例えば、1週間ロケをしてひたすら雲を撮影する監督もいます。CGを使う監督はこっちとしても楽なんですけどね。

中島：黒澤明監督が、わざわざ千歳のホールで音を作られたということ

がある。やっぱり、「北海道の空気」が大切というところです。実際に北海道で撮ったものは発色がいいとか、技術でも解決できないことがあります。北海道の特性は、CGで何でも処理できるとしても、そうではないモノが確実にあるということです。

東村：守分さんの「道」のイメージはいかがですか？

守分：小学校時代、砂川に越してきたとき「北海道には人間が一週間に一回しか通らない道がある」ということを聞かされて感動を覚えました。真っ白な雪原をウサギや熊が横切るイメージが湧いたのです。これがまさに北海道の原風景だと思う。私の原点は「人が通らない道」。

今まで一番よくなったものは道路です。今はあらゆる道路が舗装されているでしょう。道路というのはいろいろな役割があります。二点を結ぶ最短ルートという効用が一番でしょうが、道程を楽しむ道の役割もあります。自然の中の道、砂利道、



「風花」の撮影風景 (陸別上利別)

17年におよぶロケーションコーディネーター歴で、北海道を舞台にした200本以上のCM作品をコーディネート、北海道のあらゆる場所を知りつくしている。主な作品は「ボカリスウェット」「カロリーメイト」「十六茶」等。また俳優としても活躍、TVドラマ、映画、舞台に数多く出演している。



山野 久治氏

ロケーションコーディネーター兼俳優
(オフィス312代表)

の中で印象深い「道」のシーンをお聞かせ下さい。
山野：何の映画だったかは思い出せないが、三叉路を目の前にして、どの道を選ぶかというシーンが印象に残っています。

中島：ゴダールの『勝手にしやがれ』。町の道路に主人公が出てきて、こっちから出てきたりあっちから出てきたりをエンエンとやる。ラストの死ぬシーンでカメラが道路を追ってゆくのは、見事に道路を哲学的に使っています。通過するという意味では『イーザーライダー』ですね。

佐々木：急がない道とか、暖かいイメージの道が好きです。『ストレイトストーリー』、『セントラルステーション』。これらは、北海道でも使うことのできる「ありのまま」の道を表現したものです。スタイリッシュな映画としては、『都会のアリス』、『ラン・ローラ・ラン』など。いずれも監督がその場に暮らして、空気感みたいなものを感じた作品です。道と風景、そして映画の音楽が非常に印象的な作品でした。

守分：世代的に『イーザーライダー』、『バリ・テキサス』ですね。『第三の男』の最後のカットは北海道のもっている透明感につながる作品です。それからチャップリンの『モダンタイムズ』。ラストカットで彼の姿が消えていくシーンは、1カットで一日が表現されている影の動き。いろいろなものを想像させてくれます。フェリーニの『道』もいいですね。一本の道を撮っただけで、人生までも表現することができるのです。

中島：原マサト氏の制作による8時間のロードムービーがあります。芭蕉の『奥の細道』を二人の息子と一緒にVTRに収めていくという作品です。もし芭蕉が現代に生きていたら、俳句ではなく映像として風景を収めたんだと思います。旅とは記録ともいえるからです。

去年作った「ロケ地100選」は、北海道の素晴らしさを知ってもらおうこと、誇りに思ってもらおうことを意図しています。北海道にはホントにいいロケ地がたくさんあります。それを財産として認識することが大切です。財産だから壊さないようにしませんかという気持ちもすごくあります。そのまま残せばいいというわけではありませんが。

北海道の道路は「通過」というイメージがあります。道路というのはアスファルトの何の変哲もないモノですが、ロードムービー的に見ると、非常にイメージ豊かなモノになります。

守分：「道」というものには3つの性格があると思います。1つは人生とか、なにか「異次元」に



オロロンライン（国道232号／苫前町）

山が見える道。地域の人が大切にしている道。個性豊かないろんな道をこれから残してゆく時代になってゆくと思います。すべてが最短ルートだと味気ないですよ。

東村：最後に、みなさんがいろいろ観てきた映画



冬の道
(上富良野町)

向かっていくような「象徴性」みたいなもの。2つ目は、「生活者が感じる」というもの。3つ目が「旅人の目」が感じる道。1でいうなら「りんりんと」というドラマ。息子が母を老人ホームに届けるといった姥捨てのドラマです。それを「道」を通して発想を逆転させる。息子が母を捨てるのではなく、母が息子を捨てるということ。母が道を通ることで、18歳で故郷を出た時をイメージさせる。つまり、母が18歳までさかのぼるという体験を道程です。2でいうなら「本官」というドラマ。砂原町でのUFOの話で、一本の道路に飛び出すUFOの見物人を警官が交通事故から守るという場面。実際のモデルの警官はロケ直前に交通事故で入院してしまったけど（笑）。3でいうなら「リンゴの木の下で」という作品があります。

簡単に言うと残留孤児の子供の話で、その子供が一人で北海道にいるおじいさんのところに向かうという作品です。東京からトラックに乗って、高速道路をつかって北海道に向かうのですが、子供の目に映る風景が東京～東北、東北～北海道とみるみる変わっていくということに気づくのです。

ところで、私は北海道の雪は大きな財産だと思っています。東北にも雪がありますが、北海道の雪はちょっと違う。この「雪」そして「北海道の冬」こそ北海道の特性なんだから、これを上手く発信することを作り手が常に考えていかなければならない、と思います。

東村：そろそろ時間となりました。本日は貴重なご意見をたくさん頂き、誠にありがとうございました。



「風花」のクランクアップ風景(佐呂間町 岩佐)最前列まん中は小泉今日子さん 右隣は浅野 忠信さん 左隣は相米 慎二監督

北海道が主舞台になった「風花」は来春公開

●ストーリー 不祥事から謹慎を命じられたキャリア官僚の浅野忠信と風俗嬢の小泉今日子は、ある夜出逢い、彼女の故郷北海道へ一緒に旅をする約束をする。性格も生活も旅の目的も全く異なる二人の、ぎくしゃくとした北海道ドライブ。主なロケ場所となった北海道各地の幻想的にまで美しい風景はロードムービーの傑作になったと同時に感度抜群の大人のラブストーリーになった。原作も北海道出作の乱歩賞作家 鳴海 章。来春3日 シアターキノで公開予定。監督：相米 慎二 主演：小泉今日子×浅野忠信